

劇場

何という不器用さだろう。空気が重くよどんでいる。描写はくどく、せりふはきこえない。ぬかるみを進むようにして物語は始まる。

しかし、そんな印象を持った時点で読者は作家の術中にはまっている。すでに主人公の内面世界に連れこまれていくのだ。主人公の永田は売れない劇団で脚本を書く。どうもうまくいかない。劇団員には愛想をつかされた。「人間の根源的なもの」に触れたいと意気

又吉 直樹・著

またよし・なおき
80年大阪府寝屋川市生まれ、作家、よしもとクリエイティブ・エージェンシー所属のお笑い芸人。2015年に「火花」で芥川賞受賞。他の著書に「第2図書係補佐」など

込むが、思考はがちがちで硬い。好かれない気持ちがあく空回りし、周囲への嫌悪感ばかり膨らむ。うたぐり深く、嫉妬心も強い。お世辞にもカッコイイ人とは言え

小説の原点突き付ける

評・阿部 公彦（東京大准教授）

ない。

そんな永田と知り合ったのが、女優をめざして東京に出て来た沙希だ。繁華街では美容師や雑誌の編集者が次々に声をかけてくるような女性。やさしく素直で、いろんな感情がいつべんに顔に出る。永田の目には「正直すぎて感情をどれかひとつに絞られへん」と映る。

沙希は永田を尊敬し愛し

た。自分のこだわりが

じがらめの永田にとって、沙希の寛容さは癒やしだった。芝居を最優先しマイペースの永田を沙希は受け入れ続ける。

しかし、そんな関係が崩れていく。きつかけはささいなことだった。娘に送った食べ物知らない男に食べられるのは嫌だ、という沙希の母親の言葉。男友人



からもらった原付バイクをうれしそうに乗り回す沙希の顔。沙希につらくあたる主人公の姿に私たちが見るのは、まさに「根源的なもの」かもしれない。体調を崩してうつ状態になった沙希が「わたし、もう東京駄目かもしれない」とつぶやく場面は痛いほど記憶に残る。誰もが心の中で知っている話がある。

前作「火花」と同じく本書でも「笑い」は頻出する。その笑いが、苦さや悲しさで宙つりにされる。笑うべきか泣くべきか、そんな境をわたる人間の姿がこれでもかと描かれ小説の原点を突き付けられる。圧倒された。

（新潮社・1404円）